

令和7年度

入学試験 問題集

対話の先に未来を創る



MORIOKA DAIGAKU JUNIOR COLLEGE
盛岡大学短期大学部

目 次

令和 7 年度 入学試験問題出題者講評	1
---------------------	---

学校推薦型選抜

小論文	4
(令和 5 年度～令和 7 年度)	

総合型選抜（併願制）

小論文	4
(令和 4 年度～令和 7 年度)	

令和 7 年度 一般選抜 試験問題

国 語	5
解答例	13

令和 7 年度 入学試験問題出題者講評

学校推薦型選抜 小論文

幼児期に大人から掛けられて嬉しかった言葉や対応について、体験を踏まえて答えなさい。

また、嬉しいと感じた理由と、子どもたちに関わる際にその体験をどのように還元させていきたいと思うか書きなさい。

(600 字以上 800 字以内)

1 出題の意図（形式・傾向）

出題のねらいは、①出題の意味を正確に把握しているか、②課題を自分の考えで論じているか、③適切な段落構成で論理的に展開できているか、④正しい言葉や用語、文字を使用し、適切な文章表現か、⑤原稿用紙の使い方が適切で、丁寧な字で指定された字数内で論じているか、という 5 点をみることにある。

配点率は、論理能力（論旨の明確さ、着眼点）が 6 割、構成（段落構成、章立て）が 2 割、表現力（文章表現の豊かさ）が 2 割である。誤字、脱字、仮名遣いの間違い、字数の増減については減点となる。

2 採点後の講評

今回の出題は、大人の子どもに対する関わり方が、その後の子どもの育ちに与える影響について論じることを求めた問題である。子どもが周囲の大人から良い関わり方をされれば、自らが大人になった際に思いやりのある良好な関わり方をするであろうし、より良い大人の存在が、良いモデルとなって基本的な信頼関係を形成する際の基となっていく。

今回の平均点は 74 点であり、昨年度と比較して高い結果となった。要因として、幼児期の実体験について、表現力豊かにエピソードを交えながら論じていたことが考えられる。出題の意図も把握できており、誤字、脱字も少なかった。

総合型選抜（併願制） 小論文

幼児の生活の大半は遊びであると言われ、その遊びを通じて多くのことを学びます。幼児は遊びの中でどのようなことを学んでいると考えますか。

また、そのためには、どのようなかかわりが必要であるか具体例を挙げて述べて下さい。

（600 字以上 800 字以内）

1 出題の意図（形式・傾向）

出題のねらいは、①課題の意味を正確に把握しているか、②課題を自分の考えで論じているか、③自分の考えを適切な段落構成で、論理的に展開できているか、④正しい言葉、文字を使用し、文章表現の仕方が適切であるか、⑤原稿用紙の使い方が適切で、丁寧な字で指定された字数の中で論じられているか、の5点をみることにある。

配点率は、論理能力（論旨の明確さ、着眼点、独自性）が6割、構成（段落構成、章立て）が2割、表現能力（文章の豊かさ）が2割である。そして誤字、脱字、仮名遣いの間違い、字数の増減等については減点となる。

2 採点後の講評

問題は、「幼児の生活の大半は遊びであると言われ、その遊びを通じて多くのことを学びます。幼児は遊びの中でどのようなことを学んでいると考えますか。また、そのためには、どのようなかかわりが必要であるか具体例を挙げて述べて下さい。」ということで、まずは「遊びの中でどのようなことが学び」となるのかを考え、その上でその学びが得られるためには「どのようなかかわりが必要であるか」について具体例を挙げて答えることが求められている。

「遊びの中でどのようなことが学び」として考えたらよいのかについては、自分自身が子どものころに遊んで体験したことを考えると容易に想像ができるはずである。例えば、虫取り、おうちごっこ、鬼ごっこ等はほとんどの子が経験していることと考える。虫取りなどは捕まえたけどそのままにして死なせてしまったり、飼うためにはその虫の餌が必要ということを学んだり、虫によって違うことを学んだりする。おうちごっこや鬼ごっこでは、友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思いを相手に伝えたり、相手も気持ちを聞いて理解したり、遊びを進めていくうえで話し合って決めていくといった人とのかかわり方を学ぶ。

遊びからの学びは、回答者のそれぞれの遊びの体験から、何が学びになるのかを考えることが必要であり、例えば知識を得る、人とのかかわり方、物の使い方等が遊びをとおして学びになっていることと関連付けて考えることが必要である。これが提示できれば、その事例で学ぶ助けとなるかかわりを考えれば良い。

今回の平均点は、60点満点中37点であり、100点に置き換えた場合61.6点であった。上記の観点を抑えて論じていたものは高得点となっていたが、得点が低かったものは、取り上げた遊びから学ぶことの観点がずれてしまったことにあり、そのあとの学ぶ助けとなるかかわりについて具体的に示されなかった。今回の問題は、具体的な遊びや状況について提示されていないので、いかに自分の体験を振り返って答えを探し出すかがポイントになっている。問題を見たときに、何について問われているのか、自分の考えの根拠となる具体的な事柄は何かを整理して考えることが望まれる。

一般選抜 国語

1 出題の意図(形式・傾向)

国語の入試は、「現代の国語」と「言語文化」の内容を出題範囲としている。

設問は大きく三つからなり、それぞれの問題構成は、設問〔一〕が問一から問六までの6問、設問〔二〕が問一から問五までの5問、設問〔三〕が1問となっている。

設問〔一〕は、『脳の闇』(中野信子著)から出題した。問題は、漢字の書き取り5題、読み取り5題で語彙力を、5択の選択問題1題と記述問題2題で読解力を、指定した語句を用いて文章を作る問題1題で文章表現力を主に問うた。

設問〔二〕は、『ラインのほとり－旅と音楽－』(小塩節著)から出題した。問題は、漢字の書き取り5題、読み取り5題で語彙力を、5択の選択問題2題で読解力を、字数指定による記述問題1題で文章表現力を主に問うた。

設問〔三〕は、『絵本とは何か』(松居直著)から出題した。問題は、160字から200字以内で筆者の指摘する内容についてまとめる記述問題1題で、読解力や文章表現力を主に問うた。

合計100点の配点は、設問〔一〕を45点、設問〔二〕を35点、設問〔三〕を20点とした。

2 採点後の講評

今回の国語の平均点は、73.5点(昨年度の平均点は77.8点)で、そのうち最高点は82点、最低点は58点であった。

設問〔一〕と設問〔二〕で出題された漢字の書き取りと読み取りの問題は難易度がそれほど高くないと思われるものの、書き取りの問題の方で誤答が目立った。

設問〔一〕の短文を作る問題は正答が多かった。設問〔一〕と設問〔二〕共に、字数指定の記述問題は、正答に近い回答が多かったものの、選択問題では誤答も若干みられた。

設問〔三〕の記述問題は、正答に近い回答が多かった。

今回の国語の入試問題では、昨年度と同様に漢字の書き取りと選択問題による得点の差があった。受験者の文章をまとめる力や自分の言葉で表現する力を確認した一方で、漢字の書き取りと内容の読解力において課題がみえた。

これからも読書に親しみ、文章を書く事で言葉への感性を磨き続けて欲しい。

令和5年度～令和7年度 学校推薦型選抜 小論文

年 度	幼 児 教 育 科
令和7年度	幼児期に大人から掛けられて嬉しかった言葉や対応について、体験を踏まえて答えなさい。 また、嬉しいと感じた理由と、子どもたちに関わる際にその体験をどのように還元させていきたいと思うか書きなさい。 (600字以上800字以内)
令和6年度	現代の生活において、スマートフォンやインターネットなどの利用が必要不可欠になっています。その一方で、子どもたちが自然のなかで遊ぶ経験が少なくなっているともいわれます。そこで、教育や保育における電子機器の効用と自然とのふれあいについて、あなたの考えを述べなさい。 (600字以上800字以内)
令和5年度	現在、教育現場では、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）の考え方を取り入れた実践が行われている。 そこで学校教育の経験から地域社会でどのようなことができるのかについて、具体的に事例をあげながらあなたの考えを述べなさい。 (600字以上800字以内)

令和4年度～令和7年度 総合型選抜（併願制） 小論文

年 度	幼 児 教 育 科
令和7年度	幼児の生活の大半は遊びであると言われ、その遊びを通じて多くのことを学びます。幼児は遊びの中でどのようなことを学んでいると考えますか。 また、そのためには、どのようなかわりが必要であるか具体例を挙げて述べて下さい。 (600字以上800字以内)
令和6年度	近年、子どもの遊びにおける「自由に使える時間、異年齢との関わり、空き地や自由に出入りできる野山等」がなくなってきており、コミュニケーション力の減少、体力低下などの子どもたちに問題が生じている。このことについて、あなたはどのように考えるか、理由を挙げて述べなさい。 (600字以上800字以内)
令和4年度	あなたが「人間関係」を形成するために、大切にしていることは何ですか。自身の経験を踏まえて、考えを述べなさい。 (600字以上800字以内)

※令和5年度総合型選抜（併願制）は実施なし。

〔一〕 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

あいまいにしておく、という解決法を持っておくのは極めて重要なことである。

わからなさ、との共存とでもいえるまいだろうか。あえてクリアにせず、自分は常に何事もわからない状態にいるのだ、という認知に慣れておくのである。しかし、人間は「わからない」に耐えるのが苦手だ。この「わからない」を抱えておくことに耐えきれず、あいまいにしておけばいいものを、何の合理的な理由もなく暴こうとしてしまうことがしばしばある。

脳は自分の体の中で、わずかな重量パーセントを占めているだけなのに、リソースは実に5分の1から4分の1も使ってしまうという浪費家である。少しでも楽をしたいと常に願っている、働くことの嫌いな臓器でもある。

つまり、脳は、複数の考え方をあいまいなまま抱えておくことを心地よくは感じないようにできているともいえる。私たちは、それが正しかろうが誤っているかが、一つの考え方にリッキヤクし、確信を持つということに生理的なレベルで快感を感じるようにできている。それにどこまで抗えるか。限りなく確信に近づいて楽をしたいその一方で、そこに執着し続けることの怖さを自覚し、^(b)ジヤヤ的に振る舞うことのできる人はどれほどいるだろうか。

確信の怖ろしさには心理学的なトリックが潜んでいる。

アメリカの心理学者、フリッツ・ハイダーは、バランス理論という有名な心理学の理論を^(c)ティンヨウしている。これは、認知的^(a)均衡理論とも呼ばれる。人は他者との関係が不均衡になることを避けるように認知し、行動するという理論である。彼はこの理論の中で「人の確信というものは、その対象を考えると、常に独特の印象が必ず起こり、しかも他者も自分と同じ考えであるという、その信念の強さによって形成される」と主張している。

これだけではわかりにくいかもしれないので、例を挙げて解説を試みることにすると、例えば、何かを心の中で映像化するとき、たいていはいつも同じイメージを思い浮かべるだろう。リンゴならリンゴのイメージ、美人なら美人のイメージ、正義なら正義のイメージといった具合である。自分の持ったイメージと同じイメージを、別の人も持っているはずだと、人間は勝手に錯覚しているのである。この錯覚は、^(注1)わずかな手がかりからであつても、繰り返し確かめられてしまうと、さらに強固なものになってしまう。^(注2)ガズリーとホートンの実験におけるネコとあまり変わらない。自分がわずかな根拠から勝手に固定化したイメージであるのに、偏っているかもしれないその考え方を、確信という形で自分の中に埋め込んでしまう。ハイダーの主張はこのようなものである。

人が「これは私の確信です」という体^(てい)で何かを口にすると、そこには自分の中にあるイメージ群が、どこかで出会った類似の文脈によって、その信頼度を増幅させた経験が^(d)媒介されているということになろう。

そのイメージがいったん確信となってしまうと、変容することは考えにくく、^(e)覆すことは難しい。そのイメージ群が持つ微妙な差異によって、人は衝突したり、逆にその近接の中に深い共感を得たなどと錯覚して、快感を得たりもする。

こうして、人間は実際にはかなり限定的な情報源をもとに、その小さな情報圏内で、確信的な文脈を形成してしまう。なんとも残念な脳であるとも見える。

とはいえ人々のイメージの形成には、意外かもしれないが、独創的に見えるようなキョククタンな^(d)歪曲は通常は生じない。だからこそ、言語によるコミュニケーションが一定程度は成立するのであるが、ということはレジリエンス——柔軟な修復力もあり期待できないということにもなる。

論理的な判断にもとづく算法を「アルゴリズム」と呼ぶのに対し、特定のイメージの塊が確信的な文脈にまで至る過程で役割を果たすのが「ヒューリスティック処理」である。限られた数の簡易的な手がかりのみによって、^(e)ジンソクに(直感的に)判断を下すことをいう。チャンスレベル以上の確率で、正しい結果を導くことができる。

例えば、職業に対するイメージで人の性格を特定したり、他人の能力を評価したりする場合に見られるような判断で、簡易的に自分の能力を基準にして(それが平均的な能力であるかどうかという吟味はまったくといっていいほどされることなく)断定してしまうような場合が、それに当たる。

多少なりとも、人はこのような簡易的な判断処理を常日頃からしているものである。どうしても正確性と精度を求められるよ

うな決定的な判断を、我々は意外なほど必要としていない。なんとすれば、むしろ正確性と精度に欠ける解や言い回しの方が、説得力を持つことが多いくらいではないか。

日常場面では、人は最も身近でよく耳聞きしているような言説に好意を持つようにできている。それほど、脳は自分の能力を使いたがらない。その情報が正確かどうか、精密かどうかを吟味しているような時間もないし、労力をかけているエネルギー的な余裕もないからだ。

自分がすでに保持しているような心的イメージに類似したものが見出せさえすれば、それによって相手に対する好意的な評価をいとも簡単に下していつてしまう。こうして、簡易的な処理が何層にも重なって一人歩きしたものが、社会通念であったり、ステレオタイプであったり、認知バイアスであったりする。これらが中立であるなどと果たしていえるだろうか？

簡便な処理を介して集合した特定のイメージが、少しずつ固有の輝きと自律性をもって動き出してしまふのだ。そしていつのまにか、人はあらゆる対象に対して、それぞれに偏った確信を強めていくことになる。確信を持つことが、脳が使うリソースを節約し、自我を安心させるからだ。

自我を安心させるものが、論理による精密な吟味を寄せ付けない、エモーショナルな強さを持つてしまう。これらが衝突するとき、しばしば人は、互いに「バカ」と言い合うようである。思考停止した人々同士のやり取りだと笑って見過すことができるような規模であればまだよい。けれど、それが攻撃力や教養的優位という背景を持った場合、巻き込まれないように慎重に振舞っている側にも影響が及んでしまふおそれがある。

脳は私たちの体にとって最大の浪費家であり、今以上に効率的な処理の方法を自然が見つけ出すことができない限り、人は「わからない」よりも、「根拠のあいまいな確信」を求めてしまふことになるだろう。シンプルな言葉でわかりやすく仕上がっているだけの、内容をよく読めば論理的には破綻⁽¹⁾しているでたらめな理屈を、「これこそが私たちの待ち望んでいたものだ」と、しばしば性急に⁽³⁾「諸手を挙げて受け入れてしまふ。思考停止させてくれる何者かを堂に求め、それを「わかったこと」にしたがる。

人は制裁を赦⁽²⁾してくれる対象に飢えている。

パン屑に鳩が群がるように、砂糖粒にアリがたかるように、正しさに取りつかれたヒトはどんな小さな瑕疵⁽⁴⁾も見逃さない。どこからともなく、いち早く寄って来る。その食欲⁽⁴⁾さは強烈だ。逸脱者がどれほど謝罪しても、中庸者たちは正義を執行する快楽を求め続けるので、その制裁行動は止まることがない。時には逸脱者が疲弊してぼろぼろになり、死に至るまで攻撃が続けられることもある。

人間には、あいまいさをそのまま保持しておくだけの知力、努力なしにひとりでに備わることはないだろう。ほとんどの人は意識的にこれを鍛えようとしてはいないし、そんな人がもしいたとしても、暗黙の共通理解を逸脱し、ルールを犯そうとする破戒者として、多くの人の攻撃を受け、排除されてしまふだろう。

けれど、困難な道ではあっても、⁽⁴⁾「わからない」を受容することが、長期的に見れば自分と自分の大切な人を守るための有効な手段たりうるということは、どうか知っておいてもらいたいと思う。確信という安易な快楽に溺れて、愛が毒に変わってしまう前に、わからないを抱えておく知力を多くの人が持ち得る世界が訪れてほしいと願う。

(中野信子『脳の闇』より)

(注1) フリッツ・ハイダー (一八九六年～一九八八年)オーストリア生まれのアメリカで活躍したゲシュタルト学派に属する心理学者。

(注2) ガスリーとホートンの実験 心理学者のガスリーとホートンが行った実験。箱の中央に棒をぶら下げ、どの方向に棒を傾けてもドアが開き箱から出ることができる仕掛けを作り、猫を入れて実験した。その結果、猫は上手くいった行動がある、それが正しいと思い、その行動のみを繰り返し、他の行動を取らなかった。迷信行動の実験。

問一 傍線部(a)「リッキヤク」・(b)「ジセイ」・(c)「テイショウ」・(d)「キョクタン」・(e)「ジンシク」のカタカナを漢字で記しなさい。

問二 傍線部(ア)「均衡」・(イ)「媒介」・(ウ)「覆」・(エ)「破綻」・(オ)「食欲」の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

問三 傍線部(1)「執着し続けることの怖さ」とあるが、それはどのようなことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選
びなさい。

- ① 人間は「わからない」に耐えるのが苦手で、「わからない」を抱えておくことに耐えることができない。あいまいにし
ておけばいいものを、何の合理的な理由もないままにそれを暴こうとしてしまうこと。
- ② 人間の脳は複数の考え方をあいまいなまま抱えておくことを心地よく感じないようにできているため、それが正
しかろうが誤っているかが少しでも差をしようとすると、わかることを願ってしてしまうこと。
- ③ 人間は何かを心の中で映像化するとき、たいてい同じイメージを思い浮かべるものである。そのときに自分の持つ
たイメージと同じイメージを別の人も必ず持っている自分勝手に錯覚してしまうこと。
- ④ 人間は実際にはかなり限定的な情報源にもかかわらずそのイメージを固定化してしまうところがある。その小さな
情報圏の中で、偏っているかもしれない考え方を確信的文脈として形成してしまうこと。
- ⑤ 人間はわずかな手がかりからであっても、その根拠をもとに自分のイメージを固定化するものである。その固定化
したイメージを勝手に増幅させて深い共感を得たり、快感などを得たりしてしまうこと。

問四 傍線部(2)「ヒューリスティック処理」と同じ意味を表している言葉を本文から十字以内で抜き出ささい。

問五 傍線部(3)「諸手を挙げて」を用いて、四十文字以内で短文を作りなさい(ただし句読点も一字とする)。

問六 傍線部(4)「わからない」を受容することについて、筆者はどのように考えているのか。八十文字以上百文字以内で答えなさい
(ただし句読点も一字とする)。

〔二〕 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

第二次大戦中、東大図書館は蔵書の多くを信州松本に疎開させた。それと関係があったのだろう、森有正先生も家族を松本に疎開させた。義弟・関屋光彦教授が松本高校で倫理学を教えておられたためであろう。

森家の⁽¹⁾しょうしやな二階建ての洋館は、私が入寮した高校の学寮・思誠寮のすぐ裏手にあつた。四月のはじめ、中学生のころから存じ上げていたので入学のご挨拶に伺うと、二階の書斎にはところ⁽²⁾セアしとドストエフスキー関係の本が積み上げてあつて、

「いま、ドストエフスキーを読んでいます。ロシア語が読めないで、フランス語訳と日本語訳で読んでいます。たいへんなものですよ」

と語っておられたが、それがのちに『ドストエフスキー覚書』となって創元社から出た。「罪」についての深い⁽³⁾思索の書であり、明治以来の日本人がヨーロッパのこの問題点にはじめて突破口を開いた画期的な仕事だと私は思う。書斎の西の窓からは乗鞍岳が見える。唐松がようやく芽ぶいていた。お部屋の中央のすわり机の上には、ラテン語版カルヴィンの『キリスト教綱要』がひろげられている。毎朝数ページ読むのが日課の始まりだ、といわれた。

いつでも遊びにいらつしやい、とおつしやつたけれども、週日の先生はのろのろと遅い中央線の列車で東京に出、東大で講義をし、一週おきの週末に帰ってこられるだけである。少年の私は⁽⁴⁾エンリョしていた。

すると寮に淑子夫人から電話がかかってくる。「大掃除をするから、同室のお友だちと助けにきてくださいな」。そう言われて行ってみると⁽⁵⁾仕事らしい仕事はない。山のように御馳走をつくって迎えてくださるのだった。終戦直後のそのころは戦時中よりも食糧難だった。寮でも、まかないのおじさんが苦労して雑炊に野の雑草などを入れ、育ちざかりの少年である私たちの胃を充たそうと苦心していた。考えることは食べ物のことばかり。道端の雑草や木の葉を見ても、これは食べられそうだな、ということばかり考えていた。そんな中でのご馳走だ。声も出ぬほどありがたかった。同室の友人たちと、何度お呼ばれにあずかったことだろう。

ときたまはお留守番をすることもあつた。茶の間にヴィクトーの手廻しの⁽⁶⁾蓄音器があつて、バッハの『ブランデンブルク』やメンデルスゾーンの『ヴァイオリン協奏曲』を、それこそ暗記してしまいそうなくあいに聴いた。学校とも飢えともまったく異質な世界がそこにあつた。

淑子夫人は、松平家だかのやんことないお家のお嬢様だったと聞いた。⁽⁷⁾オオガツで明るく、うりざね顔に微笑のたえることのない美しい夫人だった。森先生がフランスに行つてしまわれてからも先生の⁽⁸⁾病身のお母さんに仕え、二人のお子さんを立派に育て上げられた。ピアノの名手でもあつた。

ある秋の日、山辺のぶどう畑にぶどうがたわわに実つていたころ、夫人のお伴をしてどこかへ出かけることになった。お宅の前にかなり深い小川が流れている。秋雨がかんりの水かさになつて落葉をおし流している。

玄關でやや待つほとに、みことな和服姿に白足袋も目に染みるようないでたちの夫人が現われた。こちらはボロボロの学生服に、煮しめタオルのような⁽⁹⁾デヌグいを腰から下げ、破れた白縁帽をかぶった姿だ。なんとも似つかわしくない。夫人の半歩うしろから従うことにした。

そのとき、数メートル先で近所の農家の子どもが遊びに夢中になつて小川にころがりおちた。土手を滑りおち、途中であおむけになつて水しぶきをあげて落ちた。私は、あ、落ちたな、としか思わなかつた。遊びなれた悪童だ、何とかなるだろう。

その瞬間だった、淑子夫人は⁽¹⁰⁾草履をさつと脱ぎ捨てると、友禪の上等なお召しの和服のまま泥流の中にまっすぐさんぷとどひこんだのだ。そして上向きのままもがいている六、七歳の男の子を両腕で抱えあげ、ヌヌヌの泥の斜面に白足袋の足先を打ちこむようにして路土にあがつてこられた。大地の上に立たされた泥だらけの子どもはワツと泣き出し、自分の家に向つて帰つていった。夫人の服は、泥水でまっくろだった。夫人は眉もしかめず、着換えに戻つていかれた。ボロ服姿の私は、自分が一セシちも身を動かさなかつたことを深く恥じて、その場に立ちつくしていた。いまもそれを思い出すと、⁽¹¹⁾全身から汗が出るほどに恥ずかしい。

それから数年の月日がたった。

また大学院生だった私のところへ、元東大総長・南原繁先生から毛筆のおたよりが届いた。パリに行って森君に日本へ帰ってこい、東大はきみを必要としていると説得したが、ついに聴きいれてくれなかった。そのうえ、夫妻は別れることになった。「いたましいことです。貴君は夫人をお励ましいただきたい」とあった。しかし若い私に何ができたろう。何ひとつできなかった。

夫人はその後、恵泉女学園の園長秘書をしながら長男有行君を大学にやり、聰子嬢はパリのお父さんのもつとに渡り、日本人としては史上初のリセの教授になった。さらにその後夫人は私立女子学院の購買部に勤められた。私の娘が女子学院中学を受験し、発表の朝、本人が見に行くよりまえに淑子夫人から「おめでとございます」とお電話があった。学校でこれからいろいろお世話になることでしょう、と簡単に挨拶しただけだった。

その直後、森有正先生は、パリで亡くなった。そしてまるでそのあとを追うようにして淑子夫人も、昔と変わらぬままの微笑を顔に浮かべながら急逝された。少年のころにお世話になりましたと、一言お礼を申し上げることをオコタつたまま、もう永久に手遅れとなってしまうた。

たったひとつの慰めは、晩年の森有正先生がときたまの帰日の折には前夫人と会い、まるで仲の良いお友だちのようだったことである。そして最後の年には一台のリード・オルガンをプレゼントされている。

(小塩節『ラインのほどり―旅と音楽―』より)

(注1) 森有正 (一九一一年～一九七六年)日本の哲学者、フランス文学者。明治の政治家、森有礼(一八四七年～一八八九年)の孫。

(注2) リセ フランスの五年制国立中等教育機関。

問一 傍線部②「セマ」・③「エンリヨ」・④「オオガウ」・⑤「テヌグ」・⑥「オコタ」のカタカナを漢字で記しなさい。

問二 傍線部⑦「思索」・⑧「審言器」・⑨「病身」・⑩「草履」・⑪「急逝」の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

問三 傍線部①「じょうしゃな」とあるが、どのような意味か。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① 質素であり、味わいのある様子
- ② 豪華であり、いかにも裕福な様子
- ③ 静かで、わびさびの趣がある様子
- ④ すっきりとして、あか抜けている様子
- ⑤ 飾り気はないが、頑丈な様子

問四 傍線部②「仕事らしい仕事はない」とあるが、淑子夫人が筆者と友人たちを大掃除という名目で食事に招いたのはなぜか。その理由を八十字以内で説明しなさい(ただし句読点も一字とする)。

問五 傍線部③「全身から汗が出るほどに恥ずかしい」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選
びなさい。

- ① 上等な和服姿の淑子夫人が泥にまみれて溺れた子どもを川から救い出したのを見たとき、筆者は常日頃お世話になっている夫人に対して、迷惑をかけてしまったという自責の念にかられたから。
- ② 当時、若者であった筆者が率先して溺れている子どもを助けるべきであったが、年配の女性である淑子夫人が川にとびこみ、子どもを抱えて路上にあがってきたとき、夫人に対して大きな敗北感を味わったから。
- ③ 淑子夫人は、上等な和服が泥水で汚れることも構わず川に入り、溺れている子どもを救い出したが、自分はそれを見ただけで何もなかったことを筆者が今でもとても後悔しているから。
- ④ 小川に子どもが落ちるのを見たとき、筆者は淑子夫人と散歩中で放っておこうとしたが、夫人はすぐさま川にとびこんで子どもを救い出し、何もなかった自分を軽蔑しているだろうと考えたから。
- ⑤ 小川に落ちた子どもを自分が助け出そうとすることができたにもかかわらず、淑子夫人の方が真つ先に泥流に入り、和服を汚しながら子どもを救い出したとき、筆者は人生経験の差を見せつけられた思いがしたから。

〔三〕 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

近ごろの幼児は、かなり早い時期から文字を読むようにしむけられています。四歳ぐらいで字が読める——本が読めるかどうかは疑問ですが——子どももいます。

五歳にもなると、おかあさん方は熱心に字を覚えさせようと努めます。絵本はまずたのしんでみるものであるにもかかわらず、たどたどしく、懸命に、絵本の文の字を声をあげて拾い読みしている幼児の姿を見ると、やれやれと思います。

はたして、こんな方法で、子どもが読書のたのしみを知るでしょうか。本の世界へはいつてゆけるでしょうか。疑問です。

本を読むことは字を読むことではありません。もし読書が字を読むことなら、わたしは、日本語で書かれている本なら、どんなにむずかしい本でも、全く専門外の本でも、終りまで読むことができます。しかし終りまで読みとおしたからといって、その本を読んだとはいえません。読書ということは、その本に書かれていることがらが、ちゃんと理解できて初めていえることです。本を読むということは、字を読むことではなく、本の内容を理解することです。字を読むことは手段であって、目的ではありません。

もし字さえ読めれば読書ができると考えますと、小学校四、五年になっても読書力のない子どものことはどう考えればよいのでしょうか。四年生、五年生にもなりますと、子どもたちの字を読む力はほとんど差がないでしょう。にもかかわらず、本を読む子と本を読まない子とはつきりとわかれてしまいます。おとなにもそのことはいえます。

字が読めるようになりさえすれば、あとは努力次第で読書はできるものだという考えには、どこか無理があり、見落としがあり、おとなのひとり合点がありません。

本を読むには、字が読めるということより、もっと別の力がいるのではないのでしょうか。その力が豊かでないと、いくら字が読めても読書はできないのではないのでしょうか。

先に、読書は本に書かれている内容を理解することだといいました。[＊]論語読みの論語知らず、ということわざは、字は読めるけれども、『論語』の中味はいつこうにわかっていない人のことを諷刺しています。逆説的ないい方ですが、わたしは、字が読めなくても本は読める、読書はできると思います。

たとえば、小学校三、四年生の子どもが読む『エルマーのぼうけん』という長編の童話を、字の読めない五歳児に読んであげたします。子どもたちは、たぶんこの物語がとても気に入ることでしょう。喜んでおしまいまで聞けだろーと思います。この物語を、五歳児が喜んで聞くということは、五歳児にこの物語がよくわかるからです。『エルマーのぼうけん』という本の内容が、はつきりと理解できたのです。わたしは、これはれっきとした読書だと思います。自分で字を読んで理解するのと、耳から聞いて理解するのと方法の違いはあっても、その物語の内容を理解した点においては読書といえるのではないかと思います。

二年生くらいの子が、苦勞して『エルマーのぼうけん』を読むのと、五歳児がおとなに読んでもらって、たのしく『エルマーのぼうけん』を聞くのでは、後の場合のほうがよくわかるし、たのしいかもしれません。わたしは、読書は修行ではなく、たのしみのためのものだと考えていますので、小さい子どもの場合は、特によりたのしい方法をとりたいと思います。

字を読む力だけでは、読書ができないとすれば、本を読むにはどんな力が必要なのでしょう。

幼稚園や保育園で、先生が子どもたちに一寸法師の話をしているとします。それを聞いている子どもたちの中で、ある子どもは一所懸命にお話に聞き入っています。ある子どもは窓から外をながめたり、隣の子と話しあったりして、お話を聞こうとしません。ある子どもは、初めのうちよく聞いていたのですが、途中から聞かなくなつて、いつの間にかほかのことに気を取られてしまいました。同じ一寸法師の話に対して、どうしてこうも子どもの反応が違うのでしょうか。どうして、お話を聞ける子と、お話を聞けない子とがいるのでしょうか。赤ん坊のときからそういう素質の違いでもあるのでしょうか。この赤ちゃんは将来お話が聞けるようになる赤ん坊、この赤ちゃんはお話が聞けないようになる赤ん坊、そんな区別が生まれつきあるのでしょうか。

一寸法師のお話を真剣に聞き入っている子どもは、一寸法師が心の中にちゃんと見えるのです。そして一寸法師がおわんの舟に乗って、はしのかいをこいで川を上り、都へついでお姫さまに仕え、そのお供をしてお寺参りをし、鬼を退治して打ち出の小

づちを手に入れ、大きくなってめでたくお姫さまと結婚するという物語の世界が、はっきりと絵(イメージ)になって心の中に見えるのです。一寸法師の短編映画が心の中に映っているのです。この子どもたちは、語り手の先生の顔や口もとをじっとみつめて物語をきいています。しかしかれらは先生の顔を見ているのではなく、心の中に映っている一寸法師を見ているのです。

一寸法師の話を少しも聞けない子というのは、どうしてなのでしょう。この子たちには、一寸法師が見えないのだと思います。一寸法師の物語の世界が、絵にならないのです。一寸法師がイメージにならないければ、いくら耳からことは聞いても、その物語を理解し、物語の世界へはいつてゆくことはできません。心の中に何も見えなければ、人間は目をあけている以上、目に映るものを見、関心の向く方へ目を移すのもやむをえません。窓から外を見、遊んでいる友だちの姿を見、隣の子と話したい、ふざけあうのもやむをえません。人間は何も見ないで目だけあけていることはできないのです。つまりお話の聞けない子は、物語を心の中で想像して、絵にする力がないのです。

途中から興味を失った子の場合はどうでしょう。この子は、初めのうち一寸法師も、その他の物語の細部も見えていたのですが、たとえば「みやこ」へ着きましたというところで、つまづいてしまいました。「みやこ」ということがよくわからない、つまり目に見えなくなると、一寸法師は活躍する舞台を失ってしまいます。舞台がなくては、物語は進展しません。映画を見ている最中にフィルムが切れたようなものです。フィルムが切れては仕方がありません。この子も別の目に見えるものを見るしかないでしょう。とぎれとぎれに物語が見えても、おもしろくはありませんから――。

こういうふうに推測してきますと、物語を聞ける力というのは、物語という目に見えない世界を、自分の心の中に見えるようにする、絵(イメージ)にする力です。一般に想像力(イマジネーション)といわれる力です。

想像力が豊かであれば、人間は見えないものを見ることが出来ます。

絵本は、子どもたちの想像力に大きなかわりがあります。

子どもは、生まれたときから、豊かな想像力を持っているわけではありません。それは直接、間接の体験を通して獲得されるものです。体験が豊かであればあるほど、想像力も豊かになるでしょう。絵本は、幼児にとって体験を豊かにする機会をあたえます。

さきほど、一寸法師のことをもうしましたが、あの中でお話した、一寸法師の物語が聞けない子に、一寸法師の絵本を見せたらどうでしょうか。きつと終りまで聞くでしょう。ちゃんとこの物語がわかるでしょう。なぜなら、自分の力では物語のイメージが浮かばない子でも、絵本のさし絵を見れば、それを手がかりにして、心の中に一寸法師を思い描くことができます。物語の進展にしたがって場面がかわれば、また新しいさし絵が、消えそつになる子どものイメージをささえてくれます。こうして、さし絵に助けられつつ、子どもは心の中に物語の世界を描いてゆくことができ、一つの新しい体験を自分のものにします。

こうして、多種多様な豊かなイメージを自分のものにして初めて、人間は未知のものを想像し、理解することができるようになります。

(松居直『絵本とは何か』より)

問 筆者の考える読書と、読書に必要とされる力はこのようなもので、絵本はどのような効果を持つものと述べられているのか、百六十字以上二百字以内で書きなさい。

令和 7 年度 一般選抜試験問題解答例

国語 配点 100 点

- 〔一〕 問一 (a) 立脚 (b) 自制 (c) 提唱 (d) 極端 (e) 迅速 (2 点× 5)
- 問二 (ア) きんこう (イ) ばいかい (ウ) くつがえ (エ) はたん
(オ) どんよく (2 点× 5)
- 問三 ④ (3 点)
- 問四 簡易的な判断処理 (4 点)
- 問五 彼の発言にクラスみんなが諸手をあげて賛同し、スローガンが決定した。 (8 点)
- 問六 人間は、「わからない」に耐えるのが苦手で根拠のあいまいな確信を求め、簡易的な手がかりのみで迅速に判断を下し、偏った確信をもってしまうので、「わからない」を受け入れることが必要だということ。 (10 点)
- 〔二〕 問一 (a) 狭 (b) 遠慮 (c) 大柄 (d) 手拭 (e) 怠 (惰) (2 点× 5)
- 問二 (ア) しさく (イ) ちくおんき (ウ) びょうしん (エ) ぞうり
(オ) きゅうせい (2 点× 5)
- 問三 ④ (3 点)
- 問四 終戦直後の食糧難の時代で、淑子夫人が育ち盛りの少年であった筆者や友人たちの空腹を察して、気兼ねなく森家を訪問できるように配慮したから。 (8 点)
- 問五 ③ (4 点)
- 〔三〕 問 読書とは、本に書いてある字が読めることではなく、書かれている内容を理解することである。本を読むには、物語を絵 (イメージ) にする想像力 (イマジネーション) が必要で、想像力は、体験を通して獲得されるものである。絵本にはさし絵があり、子どものイメージを助けるため、子どもは物語の世界を絵にすることができ、一つの体験を得る。絵本には、子どもの体験と想像力を豊かにする効果があり、読書する力を高めるものである。 (20 点)

試験会場までの案内

本学会場

盛岡大学・盛岡大学短期大学部

岩手県滝沢市砂込808番地
〒020-0694 ☎019-688-5560

交通案内……………

◎盛岡市内から

岩手県北バス「盛岡大学行」または「沼宮内行」乗車
「盛岡大学」または「盛岡大学前」下車

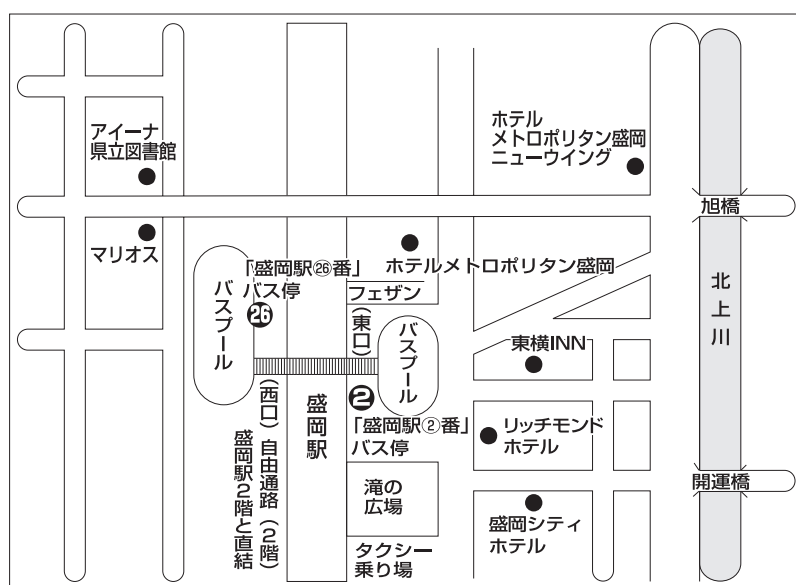
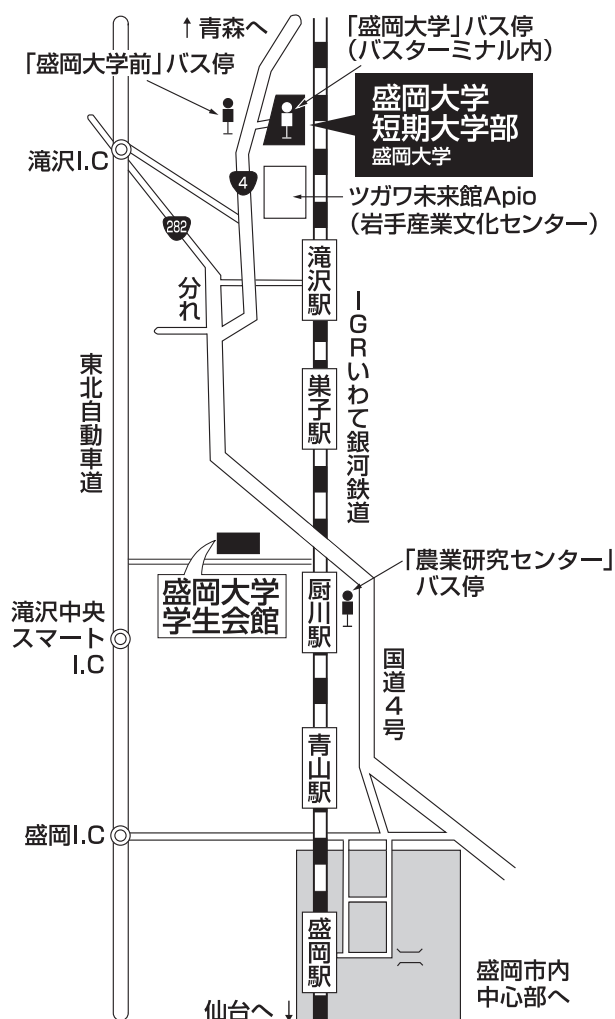
所要時間

「盛岡バスセンター」から約40分
「盛岡駅東口②番」から約30分
「盛岡駅西口②番」から約30分

◎自動車で

東北自動車道滝沢インターチェンジより国道4号を
青森方面に向かい約5分

* 「盛岡駅東口②番」と「盛岡駅西口②番」
バス停は下図参照



● 特別選抜要項（願書）

● その他資料請求

はこちらから



〒 020-0694 岩手県滝沢市砂込 808 番地

盛岡大学・盛岡大学短期大学部 入試センター

☎ 019-688-5560（直） ☎ 019-688-5555（代）

<https://www.morioka-u.ac.jp/>

E-mail : mcnyushi@morioka-u.ac.jp

盛岡大学・盛岡大学短期大学部 資料請求における個人情報の取扱いについて

ご提供いただいた個人情報は、学内で管理し、大学案内や願書、オープンキャンパスの案内等本学の情報の発信のため以外には使用しません。学内資料作成のために個人を特定しない形で、統計的な調査に使用することがあります。

今後、本学からの資料の発送等の情報提供が不要の場合は本学入試センターにご連絡ください。